
「先輩、あのね。～tearlove～」

R i n ♪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「先輩、あのね。〈tear love〉」

【Nコード】

N4291Z

【作者名】

R i n ♪

【あらすじ】

「この恋は絶対に叶わない・・・。」

彼女がいる先輩を好きになってしまった美香。

好きなのに近づけない。。。、

好きなのに、想いを伝えられない・・・。

そんな切なく苦しい恋をする美香の想いに、

美香のクラスメイト・匠が気づき・・・。

彼女がいる先輩を想う美香。

美香に好きな相手がいても、守ろうとする匠・・・。

4人の複雑な恋が、時には離れ、時には絡み合う・・・。

叶わない恋

〈第1話〉

先輩、あのね。

好きです、大好きです。

先輩は明るくて、気さくで、こんな私にも優しくしてくれて。

先輩を見てるだけで、胸がきゅうつとしめつけられて、ドキドキするんです。

…だけど、私がいくら先輩を想っても、この恋が叶うことはないんです。

誰よりも、先輩のことが好きなのに…。

私の初恋は、絶対に叶うことのない、つらい恋なんだ…。

*

ピーーーー！

「試合終了ー！」

試合終了の笛が鳴ったと同時に、体育館に歓声が響きわたった。

「やったー！」

私も嬉しくて、思わず、立ち上がってしまった。

「ナイス、皇！」

「最高！」

「皆のおかげだつて！」

コートの中で、皆に囲まれてるのは、長谷川皇先輩。同じ高校の2年生。

バスケット部のエースで、明るくて、気さくで、皆に人気がある。

…そして、私の好きな人。

「皇っ、お疲れ様！」

走りながらコートの中に入ってくる、女の人。

「夏希！」

先輩とその人が、ハイタッチしてる。私はそれを、悲しそうに笑いながら見つめていた。

私、桜木美香、高校1年生は、皇先輩に恋をしている。

先輩は、私の初恋なんだ。

…だけど、先輩には彼女がいる。

その彼女は、今、皇先輩と楽しそうに話してる、篠原夏希先輩。

夏希先輩は、皇先輩と同じ2年生で、生徒会の副会長さん。

美人で頭よくて、気取らなくて…、誰にでも優しい、
皆の、憧れの先輩…。

「いいなあ…、夏希先輩は。」

私は、きゅうつとしめつけられる胸をおさえながら、そう呟いた。

…私と先輩が、初めて会ったのは、雨の日だった。

その日私は、受験会場に行く途中で、でもコケて怪我して、傘も壊れちゃって…。

道端にうずくまっていた。

「（どうしよう、このままじゃ遅れちゃう…!）」

その時、

「君、大丈夫？」

…困ってた私に、1番に声をかけてくれたのが、先輩だった。

「あ…、ちょっとコケちゃって」「そうなの？あつ、もしかして君、
受験生？」

「あ、はい。」

「そこの東高校？」

「そうです。」

先輩は時計を見ると、私の顔をジッと見つめた。

「…少しだけ、我慢してて。」

小さな声で、そう呟いた先輩は、私を抱きかかえた。

「え…。」

「すぐ着くから！」

そう言っ先輩は、私を東高校まで送ってくれた。

…ねえ、知ってる？先輩。

私にはその時、先輩がすっごく、キラキラして見えたの。

皆通りすぎてく中で、先輩だけが声をかけてくれた。

後から知ったけど、その日先輩には大事な試合があつて、先輩も遅刻しそうだったのに、私のけがの消毒までしてくれた。

優しくて、キラキラしてて…。

そんな先輩に恋をした。

なのに、彼女がいるなんて、知らなかったよ。

あんなにキレイな彼女さんに、私勝てないよ。

…もう、好きになっちゃったのに…。

けどやっぱり、先輩のこと諦められなくて、先輩が入ってるバス
ケ部のマネージャーになった。

先輩は私のことを、ただのマネージャーとしか、見てない。

そんなことわかってる。

…だけど、そばにいたい。

先輩に、見てもらえなくても、好きになってももらえなくてもいい。

ただ、そばにいたいだけなんだよ…。

大粒の涙

〈第2話〉

キンコンカンコン…。

「美香、次、教室移動だよ！」

「あ、うん！」

3時限目の終わり。

私は教科書をそろえ、友達と一緒に教室を出た。

廊下を歩いていると、

「あつ、ねえ美香！」

「なに？」

「ほら、そこ！」

友達が、窓の外を指さしている。そこには…、

「ほら、匠くん（ ” ” ）」

木にもたれかかって読書をしている、伊藤匠くんがいた。

匠くんは、私のクラスメイト。だけど、しゃべったことないや。

クールで、授業出ないのに頭よくて、先生たちもなにも言えない感じの人。

けっこう、女子からは人気らしいんだけど…。

「匠くんさー、かっこいいよねー（ ” ” ）」

「そうかなー？」

「えー。美香、匠くんのこと、かっこいいと思わないの？」

「んー。別に…。」

確かに匠くんは、人を寄せつけない独特の雰囲気を持つてる。

女子からクツキーとか、絶対にもらわないんだろっな（〇く――

気づかれた恋心

〈第3話〉

ダン、ダン、ダン！

「皇、パス！」

「入れる皇！」

「おっしやー！」

次の瞬間、先輩がふわりと宙に飛び上がり、ダンクシュートを決めた。

「わあ…！先輩すごい！」

私はバスケットボールを磨いている手を止め、つい先輩に見いつてしまった。

「（本当に、キラキラしててかつこいいなあ…。）」

私がバスケ部のマネージャーになって、3ヶ月。

先輩がバスケ部に入ってるってわかって、どうしてもマネージャーになりたくて、友達と一緒に頼みにいってもらったんだっけ。

入ったばかりの時はちょっと不安だったけど、やっぱり入ってよかったな…。

部活は、私が先輩を見つめてられる唯一の時間。

他は、ずっと夏希先輩と一緒にいるから……。

その時、

「おーい、桜木！」

「（えっ！？）」

私がバツと顔を上げると、そこには皇先輩と夏希先輩が…。

「ど、どうしたんですか？」

「なんかね、皇がさっきシユートした時、ひざぶつけちゃったみたいで…。」

夏希先輩が、少し呆れぎみに言った。

「桜木さん、手当てしてあげてくれる？私、ちょっと今、手が離せなくて。」

「あ、はい！」

鼓動がはやりだした。

私にとっては、願ったり叶ったりだし！

「い、今手当てしますね！」

私は、消毒液を握る手が、震えてることに気づいた。
でも怖い震えじゃなくて、緊張の震え…。

私は、深呼吸をし、落ち着かせてから、消毒液をふくんだティッシュを、先輩のひざに当てた。

「うわ、しびれるー。」

「い、痛くないですか？＝」

「平気だよ＝」

「あ、はい！」

ひざに当てていたティッシュを、もう一度ひざにギュッと押しつけ、

離れた。

「今ばんそうこう貼ります！」

と、勢いよく立ち上がった瞬間、床のティッシュに足をすべらせ、私は後ろ向きに倒れた。

「っわっ！」

「！！桜木、危ない！」

どっしーん！という派手な音に、体育館にいる全員が振り向いた。

私は、転んだのに痛くないことに、頭に？マークを浮かべていた。が、後ろを見ると、そこには痛そうに顔をしかめている先輩が…。

「せ、先輩！すみません！」

よりによって先輩にけがさせちゃうなんて…！

私の顔が真っ青になった。

「大丈夫ですか？」

私先輩の腕を掴もうとすると、先輩がいきなり立ち上がった。

そして、私に二カッとした笑顔を見せた。

「オレは大丈夫！頑丈なんだよ！てかそれより、桜木大丈夫か？どこか痛いところない？」

ドキン…。

先輩、自分もけがしてるのに、真っ先に私の心配してくれるなんて…。

「…先輩は、優しすぎます。」

「…え？」

言い終わってから私は、ハッとした。

どうしよう、いきなりこんなこと言って変だと思われないかな…。

「あ、あの…。」

「…すげー、びっくりした。」

「え…?」

私が顔を上げると、先輩が、照れたような、嬉しそうな顔をしていた。

「いやオレさ、ずっと桜木に、なんか…、恐がられてる? つつーか嫌われてんのかなって…。」

「え!? 何ですか!?!」

「だって桜木、いつもオレと目があうと、顔そらすだろ?」

「そ、それは…。」

恥ずかしかったから
なんですが…。

「だからさ、嫌われてるのかなって。」

…私、そんな風に思われてたんだ…。

どうしよう…、

誤解ときたいよ…!

「…き、嫌いじゃないです。」

「え…?」

私は必死に先輩に伝えた。

「せ、先輩のこと、嫌いじゃないです…。ただ、うまく話しかけれなくて…。」

私はバツと頭を下げた。

「誤解させてしまったなら、ごめんなさい！」

しばらくの沈黙が続いた。

先輩、引いちゃったのかな…。

でも、誤解されるよりはいい…。

とその時、私の頭に、温もりがある先輩の手がおかれた。
優しくてあたたかい手…。

「ありがと、桜木。」

「先輩…？」

「桜木の気持ち、ちゃんと伝わった。ありがとな…！」

「っはい…！」

先輩、大好きです。

あなたのその、優しくて、輝いた笑顔は、皆を幸せにする。

…私、先輩を好きになって

本当によかった…。

「ヤバい！遅くなっちゃった！」私は部活の成績表を持ち、教室へ戻ってきた。

窓の外はもう真っ暗で、風がヒューヒューと音を立てていた。

「早く帰んなきゃ！」

カバンを取り、帰る支度をしていたその時、

「ちょっと待てよ。」

え…？

私がゆつくりと教室のドアを開けると…、

「た、匠くん…。」

「ちょっと話があるんだけど。」

私に話…？

私、何かしたっけ…。

「あの、なんの用で…。」

「あんた、2年の長谷川皇のこと好きだろ？」

「…え…？」

いきなり匠くんの口から飛び出した衝撃的な言葉。

私はその場から動けなかった。

窓の外では、一段と風がゴウゴウとうねりをあげていた…。

04 まさかのデート

（第4話）

「あんだ、2年の長谷川皇のこと好きだろ？」

匠くんの言葉と視線に、私は足が動かなかった。

そしてやっと言葉を絞りだし…。「なんのことですか？別に好きじゃないです。」

「ウソ。…さっき見てたんだぞ。体育館であんだと長谷川が話してる。」

ぎくつと、私はまばたきを何回かした。

「だって私、マネージャーですから。マネージャーと部員が話してちやおかしいですか？」

「…長谷川はあんだのこと、ただのマネージャーとしか見てないだろうけど。あんだは長谷川をただの部員としてじゃなく、特別だと思ってる。」

「なんでそんなこと…。」

「見りゃわかるよ。だってあんだ、長谷川と話するとき、めっちゃ嬉しそうな顔してるし。」

「なっ…、」

言葉とは反対に、私の頬はどんどん紅色に染まっていた。

「ほら、やつぱり。」

「っ…。…どうするんですか。バラすんですか？それとも…。お、脅すんですか？」

私が言うと、匠くんがかすかに笑った。

「バラしも脅しもしないよ。…ただ、協力してあげようかって。」

「…はい？」

予想もしてなかった言葉に、私は啞然とした。
協力？なんで匠くんが！？

「え、なんで…。」

「そんなに警戒しないで。ただ単純に協力したいだけだから。」

「だけど、喋ったこともないのに…。協力する理由が無いじゃないですか。」

「…ま、理由なんかどうでもいいじゃん。あんたは協力してもらったら結果的にプラスなんだから。じゃあね。」

「あ、ちよつと…。！」

匠くんは、1度ニヤリと、不適な笑みを浮かべ、教室から出ていった。

「な、意味わかんない…。」

私は自分の机の脇に、ペタンと座りこんでいた…。

ソーツ……

「（よし、匠くん、まだ来てない…。）」

私は教室のドアの脇から、中を覗きこんだ。まだ、匠くんの姿はな

く、教室はいつものように、賑やかだった。

「ふー、よかった。さ、行こ！」と、私が教室に入ろうとしたその時、

「おはよ。」

私の肩をポンと、匠くんがたたいた。

「た、匠くん…。」

「なにやってんの？」

何、このあやしい笑顔…。

絶対になんか企んでるよ！

「おはよう。なにか用ですか？」「ん…、別になんでもないけど。てかさ、その堅苦しい敬語やめろよ。クラスメイトなんだし。」

「……わかった。」

フ…と匠くんが、「いい子。」と優しそうに笑った。

この人、こんな顔もするんだ…。なんか、クールなイメージしかなかったから意外…。

「ほら、教室行くぞ。」

「あ、あ、うん！」

ガラガラガラ！っという、かなりの大きなドアを開ける音に、教室が静まった。

「なんで匠ちゃんと桜木さんが？」「変な組み合わせ…。」

ヒソヒソと女子たちがささやきあっている。

こういう空気、苦手だな…。

私が少しオドオドしていると、それに気付いたのか、私の背中を匠くんが軽く押した。

「わっ…。」

その弾みで、私は自然に教室に入ることができ、クラスの雰囲気もだんだんとにぎやかになった。

「ちよっ、美香、なんで匠くんと一緒だったの!？」

机につくなり、私に質問をしてくる友達の小春に、私は、さあ？と首かしげをした。

「私もよくわかんない…。」

…あの人、本当なんのつもりで私に構ってくるんだろ…。

やっぱりからかわれてる…？

…でも、皇先輩を好きってことがバレちゃってる以上、協力してもらうしかないのかな…。

フーッと私が浅いため息をつくと、廊下側の窓がコンコンとたたかれた。

「ん？」

見てみると…、

「!!、皇先輩!」

「おっはー、桜木。」

「ど、どうしたんですか？わざわざ1年のクラスに…。」

先輩が入ってきたとたん、女子が一斉に振り向いた。

先輩、モテモテだからなあ…。

「ちょっと桜木に頼みごとがあつてさ…。」

「は、はい、なんでしょう…、」
とその時、

「長谷川先輩。」

こ、この声は…。

私が振り向くと、やっぱり…。

そこにはニヤニヤしている匠くんがいた。

「あれ、君…。」

「1年の伊藤匠です。桜木になにか用ですか？」

「あ、もしかして、桜木の彼氏なの？」

「なっ、ち、違います！ただのクラスメイトです！」

先輩だけには誤解されたくない！私は声が裏返ってることにも気づかず、つい力説してしまった。

「あ、彼氏じゃないの？」

「全然違います！と、ところで頼みごとってなんですか？」

「あ、そうそう！」

先輩が、ニツコリと私に笑いかけ、手をポンとたたいた。

「実はさあ、もうすぐ夏希が誕生日なんだ。」

「そうなんですか？」

「…なんだけど、オレ女子になにあげたらいいかわかんなくて…。だから、桜木に聞こうかと…。」

夏希先輩、誕生日なんだ…。

少しだけ、胸がズキンと痛んだ。だけど…。

「私でよかったら、協力しますから。」

私は笑顔をつくった。

「本当か、桜木！やった！」

…先輩の笑顔が見たいから…。

「じゃあ、なにから…。」

「どうせなんだから、一緒に買い物行ってきたら？」

間で話を聞いていた匠くんが、私と先輩の顔を交互に見ながら、言った。

意地の悪そうな、ニツコリとした顔で。

「な、なにいつて…。」

「いいじゃん。一緒に言った方がわかりやすいし。どうですか、長谷川先輩？」

「おう！そうだな。一緒に行った方がわかりやすいな！桜木、今日放課後あいてる？」

「あ、はい！」

「じゃあ決まりだな！」

ええ…！

本当に！？

私と先輩が…！？

「デートだな。」

耳元でそつとささやかれた匠くんの言葉…。

まさかの、先輩とのデートの
始まりです！！

「好きだから」なんて言えない・・・

〈第5話〉

――放課後――

ついに先輩とのデート…。

私はドキドキしながら、校門の前に立っていた。

…なんか、こうして先輩を待っていると、一瞬だけど、彼女になった気分…。

「桜木！」

聞き慣れた声に私は我にかえり、顔を上げた。

「先輩！」

「遅れてごめんな。」

「いえ、私も今来たので、大丈夫です！」

先輩が優しく笑い、「そつか。」と呟く。

こんな少しのやりとりでも、私は嬉しくてたまらなかった。

「よろしくな、桜木。じゃ、まずどこ行く？」

「そうですねー。夏希先輩って、どういう物が好きなんですか？」

「んー、ストラップとかはよくつけてるけど…。」

「ストラップ…ですかぁ。」

私はお気に入りの雑貨屋さんや、ショッピングモールを、先輩と回った。

途中、人波にはぐれそうになった私の手を、先輩が握りしめてくれて、顔が火照ってしまった。

「うーん、中々、いいのですね…。」

「そうだなー。」

そう言うと先輩は、落ち込んだように深いため息をついた。

「先輩…？」

「…なんかシヨックだなんて…。オレ、夏希の好きなものも知らないとかダサすぎる…。夏希の彼氏なのにさ…。」

「夏希の彼氏」

その言葉に、私は胸が、針で刺されたようにズキンと痛んだ。

皇先輩が、夏希先輩をすごく大事に思ってることは、よくわかってる。

私は、そういう、先輩の優しいところを好きになったから…。

私は、手の平をギュッと握りしめた。

「…ダサくなんかいいです。」

「…え…。」

「先輩は、すぐくすぐくすぐく、夏希先輩のことを考えてるじゃないですか。先輩は、人のことで一生懸命になれる人です。」

「…その一生懸命な先輩は、ダサくなんかいいです。」

「…初めて、先輩の目を真っ直ぐ見ることが出来た。」

私は一体今、どんな顔をしていてどんな目をしているんだろう…。驚いて、目を丸くしている先輩の顔しか見えなかった。

「…変なこと言ってますみません、先輩。行きましょうか。」

私が後ろを向いたその時、私の右腕が、がっしりとした、だけど優しい、先輩の手につかまれた。

私は、先輩の方を向かなかった。

「…どうしたんですか？先輩。」「…桜木てさ、どうしていつも、オレのこと、そんな良く言ってくれんの…？オレ、そんないいやツじゃないよ。」

…先輩、それはね。

先輩のことが大好きだからだよ。

先輩の良いところ、いっぱい、

知ってるからだよ…。

だけど…、そんなこと言えない。

「好きだから」なんて、

言えるわけがない…。

「…本当のこと、言っただけですよ…。」

…だけど…、

「好きだから」なんて

言わないから。

この想いは、胸の奥深くに、
閉まっておくから。

…せめて、これだけは
言わせてください…。

「私にとって、先輩は…、
とても大切な人なんです…。」

無理やりに、笑顔を作る。

心配させたくないから。

…先輩は、私がそう言った意味を聞かなかった。

ただただ、見たことのないほど、真っ直ぐな瞳で。

私を見つめていた…。

結局、私と先輩は、恋人用のペアで売ってるハートのストラップを
選んだ。

ストラップを買うときの、嬉しそうな先輩の顔を見て、初めて、先
輩に恋したことを憎んだ。

…先輩を、好きになってしまった自分を憎んだ…。

臆病な私

〈第6話〉

デートの翌日の朝。

先輩から、

「昨日はありがとう。」って、メールが届いてた。

いつもは嬉しいはずの先輩からのメールも、今は…、

色あせていて、虚しかった。

学校についた私は、なんとなく、匠くんがいる裏庭の方へ、向かってしまった。

匠くんがいつもいる、ソメイヨシノの木…。

今は、冬の寒さで、枯れ葉になってしまっている。

なんとなく、私と似てる感じがした。

「…匠くん。」

私の声に、読んでいた本の上から、匠くんが顔を出した。

「桜木…。びつくりした。」

と、不意に涙が、ポロポロと頬を伝ってきた。

「え…、ちょ、桜木…。」

私が泣いている理由を知らない匠くんは、目の前で戸惑っていた。

「…匠くん、ごめん…。」

「え、いきなりなにが…。」

「…せっかく、匠くんが、先輩とデートさせてくれたのに…。私、何も出来なかった…。チャンスだったのに…。しかも、先輩のこと困らせちゃって…。」

…こんなこと、匠くんに言ってもしょうがないってわかってる。

だけど、誰かに話さなきゃ、悲しさで、切なさで、苦しさで、心が破裂しそうだった。

「桜木…。」

ごめんね、匠くん。

泣いたりして…。

匠くん、困るよね…。

そう思うのに、涙が止まらなかった。

「桜木…。…大丈夫だ。」

そう言って、匠くんは、しゃがみこんでいる私の頭を、優しく、撫でた。

とても、あたたかくて優しい、いつもの匠くんからは想像できないほどの、安心感があった。

「…ありがとう、匠くん…。」

…夢に見た、先輩とのデート。

大好きな人とデートするって、どんな感じだろうって、ずっと憧れてた。

だから、何度も、何度も、何度も、夏希先輩になりたいと思った。

先輩に愛されてて、大切にされてて、ずっとそばにいられる夏希先輩が、悔しいくらいに、羨ましくて…。

だけど、もし私が夏希先輩だったとしても、皇先輩との恋愛なんて無理だったかもしれない…。

こんな、臆病で、自分の気持ちさえ伝えられない。

…臆病な私。

変わりたいよ…。

「…匠くん、どうやってら変われるのかなあ…。もう、こんな臆病で素直じゃない自分やだよ…。」

泣いて、もうなにがなんだかわからなくなってる私の肩をつかみ、匠くんは真っ直ぐな目で、私を見た。

そして、優しい声で呟く。

「…無理して変わる必要は、ないだろ…。」

「…え？」

いつになく真剣な瞳に、吸い込まれてしまいそうで、少しだけ目をそらした。

「誰だって恋愛で傷つきたくないから、どうしても臆病になる。桜木だけじゃないだろ。それに、素直じゃなくても、桜木にはいい良いところあんじゃん。」

いつもポーカーフエイスな匠くんが、顔を真っ赤にしている。

励まそうとしてくれていることが、痛いほど、伝わってきた。

「うまく言えないけど、オレは今のままの桜木が、一番いいと思うから。だから、変わる必要なんて、ないだろ。」

今の私には、残酷すぎるくらいに優しい言葉だった。

胸の奥に、匠くんの言葉がジンと響き、私はプツリとなにかの糸が切れたように、

…号泣してしまった。

頬を伝う、大粒の涙。

それは全部、匠くんのあたたかくて優しい腕のなかに、吸い込まれていった。

…全部、匠くんが
受けとめてくれた…。

本当のキモチ

〈第7話〉

12月。

風がすっかり冷たくなり、マフラーや耳当てをよく見かけるようになったこの季節。

街は、すっかりクリスマススムードで、行く先々に、色鮮やかなイルミネーションがあつた。

私達の学校でも、おっきなクリスマスツリーが玄関に飾られ、クリスマス計画をたてるカップル達が、多くなってきた。

「桜木、帰るぞ。仕度しろ。」

「あ、今行く!」

…私と匠くんにも、変化が。

あの、私が匠くんの前で泣いてしまった日から、帰りは必ず家まで送ってくれるようになった。

訳を聞いても、匠くんは

「なんとなく。」しか言わないから、その内聞かなくなった。

「桜木、もう行けるか？」
「うん、平気！」

私と匠くんが、教室を出ると、向こうの方から、皇先輩が歩いてきた。

「おっ、桜木！」

私に気づいたのか、先輩が笑顔でかけよってくる。

「今、帰るところ？」

「あ、はい。」

「そっか、気をつけてな！」

先輩が走っていく。

私は、後ろを振り向かなかった。

…先輩とは、少し気まずくなった時もあったけど、今は普通に喋ってる。

でもそれは、あくまでも、先輩の良い後輩として。

…私は、自分に境界線をひいた。

もう、先輩のことを好きにならない。

先輩のことは、諦める。

元々、恋しちゃいけない相手だったんだもん。

もっと早く、先輩を諦めるべきだったんだ。

先輩には、あんなに素敵な彼女がいる。

好きになっただって、ムダなだけ。
…だから、諦める。
この恋を、終わりにするんだ…。

「よし、掃除終わりつと。」

私は裏庭の掃除を終え、校舎に戻ろうとしていた。

と、向こうから見覚えのある姿が走ってくる。

「桜木さん！」

「え？…つて、夏希先輩！」

走ってきた夏希先輩は、私の前で止まり、息を整えた。

「よかった。桜木さん、いて。」「どうしたんですか？」

「あのね、これ…。」

そう言つて、夏希先輩の白くて細いキレイな手から渡されたのは、英語の辞書だった。

「これ、皇に借りてただけで、返すの忘れちゃって。だけど私、これから委員会の集まりがあるの。だから…、悪いんだけど、桜木さん、これ皇に届けてきてくれない？」

「え、でも…。」

お願い！と言う風に、夏希先輩が両手を合わせた。

…先輩と今はなるべく会いたくないんだけど、これじゃ断れないなあ…。

「…はい、わかりました。」

「え、本当！？ありがとう！皇、多分、資料室でサボってると思うから。本当にありがとね！」

…夏希先輩、可愛らしい笑顔…。皇先輩が好きになっちゃうのも、わかる気がするなあ…。

私は夏希先輩と分かれた後、資料室へ向かった。そして、ゆつくりと資料室のドアを開ける。

「失礼しまーす…。」

ドアを開けた瞬間、窓から入ってきた風が、前をかすめ、思わず目をつぶった。

「わ、風が…。」

手で髪を押さえながら、目を開けると、そこには、窓に寄りかかって寝ている先輩がいた。

「先輩、寝ちゃってる…。」

私は、ゆつくりと先輩に近づき、そおつと辞書を置いた。

…なんか、こんなこと前にもあったな…。

裏庭で寝てる先輩を起こさないように…。

あの時は、先輩のことが大好きで、ただ先輩と話せるだけでも嬉しくて…。

私は、1度手をグツと握りしめて、ドアの方へ向かった。その時だった。

「…桜…木…。」

風の音に消えてしまいそうな、かすかな声に、私は耳を疑った。

先輩、今、なんて…？

「桜…木…。」

本当に本当に小さな、かすかな先輩の寝言。でも私には、ハッキリと聞こえた。

…先輩、私の名前、
呼んでるんですか…？

先輩が世界で一番大切な、夏希先輩じゃなくて…、

私を、呼んでるんですか——？

口を押さえた、私の両手に、涙がゆつくりとこぼれてきた。

「（あれ…、変だな…。いつもの涙はしょっぱいのに、今の涙は、
甘く感じる……。）」

…ああ、そうか。

涙が甘いのは、これが悲しい涙じゃなくて…、

嬉しい涙だからなんだ……。

私は、先輩の脇に、ぺたんと座りこんだ。

「先輩を諦めるなんて…、やっぱりできないよ……！」

ここ数週間、先輩のことを諦めようと必死に努力した。
なるべく、近づかないようにって、話さないようにって…。

会つと、気持ちが溢れてしまうから……。

だけど、私はなんてバカだったんだろう。

この気持ちを、この、先輩を「好き」って気持ちを、誰よりも大切
にしてあげなきゃいけないのは、私だったのに…。

…少し自分が傷ついたくらいで、恋に臆病になって、自分から、こ
の恋を捨てようとしたんだ…。

…まだ何もしてないのに？

私まだ、先輩に何も伝えられてないよ…。
好きってことも、幸せになってほしいってことも…。

私は、ようやく気づくことができた。

いくら傷ついても、何かを失っても…。

私は、この恋を大切にしなければいけない。

最後まで、見届けなきゃいけない…。

例え、どんな結果になっても…。

…ようやく私は、恋の迷路から抜け出すことができた……。

かけがえのない宝物

〈第8話〉

「はぁー、疲れたぁ…。」

私は、四時間目の体育がやっと終わり、乱れた髪を直しながら、廊下を歩いていった。

ふと、窓の外を見ると、そこには何かを大声で叫んでる皇先輩が。

「（先輩、委員会の仕事かな？）」

私は、つい頬が緩んだ。

「…先輩、頑張つて下さい…。」

小さな声で、先輩に呟く。

…なんか、不思議だな…。

先輩をやっぱ好きだって気づいた日から、なんだかまわりがキラキラして見える…。

いつもの通学路も、教室も、ノートも、全部が輝いて見えるよ…。

私は久しぶりにスキップしながら教室へと向かった…。

「なあ、桜木ってさ、クリスマス会、出んの？」

帰り道。

私は匠さんと校門をくぐり、いつものように送ってもらっていた。

「私は出るよー。だって、1年に1回の楽しみだもん！」

クリスマス会とは、毎年クリスマススイブに学校で行われるパーティー的な行事で、この日だけは私服でもいいんだ！

なんだか昔、この学校の最初の卒業生だったカップルが、記念につて、作ったらしいんだけど…。

「匠くんは出るの？確か自由参加だったよね？」

「オレは…。…桜木が行くなら行くよ。」

「え、なんで私？」

匠くんが、恥ずかしそうに、私から目をそらした。

「…だって桜木、また泣くかもしれないだろ？…その時のためにだよ…。」

「…匠くん…。ありがとね。」

…本当、匠くんは優しい。

一見、クールで無愛想に見えるけど、実は、困ってる人をほっとけないんだよね…。

「…てかそれより、長谷川先輩は来んの？」

「ああ、朝、部活で聞いたよ。先輩、来るんだって。…夏希先輩と一緒に…。」

…私達の学校には、もう1つ、伝説がある。

それは、裏庭に毎年咲く、雪の結晶に似た、ラヴァーズフラワーっていう花を、好きな人にプレゼントすると、ずっと一緒にいられるっていうもの…。

皇先輩は、多分その花を、夏希先輩にプレゼントするんだ…。

「…大丈夫か？桜木。」

匠くんが心配そうに、私の顔を覗きこむ。

私は、少し切なさが残っているような、笑顔を見せた。

「…大丈夫。もう、いくら傷ついても、先輩を好きでいるって、決めたから…。」

今度こそは揺るがない。

揺るぎたくない。

そう、決めたから…。

私につられたのか、匠くんもかすかな笑顔を見せた。

「…ならいいけど。あんま、無理すんなよ…。」

匠くんの手が、私の頭をポンポンと撫でた。

「うん！ありがとうね（*^^*）」

…本当に、ありがとう—。

「はーっ、疲れたなあ…。」

家に帰り、私は真っ先に自分の部屋に向かった。

少し茶色がかかっているベージュ色のドアを開け、カバンをほおりなげ、ベッドに倒れこんだ。

フカフカしてて、きもちいいなあ…。

今日1日の疲れが、癒されていくようだった。

「はー、クリスマス会、なに着ていこうかなあ。」

先輩が好きそうな服…。

私はハッとした。

いけない！また、先輩中心に考えちゃってる…。

私はベッドにうつ伏せになった。「…本当、先輩のこと、大好きだなあ…。」

先輩に彼女がいても、叶わない恋ってわかってても、なんかどうしても諦められないんだよね…。

多分それは…、

私の中で、先輩の存在がどんどん大きくなっているから——。

「やっぱり、先輩のこと諦めないでよかったなあ。」

…先輩と初めて会った日のこと。
初めて話した日のこと。

初めて握ってくれた手の
温もり…。

初めて知った、胸の痛み…。

全部、全部、私の
かけがえのない宝物——。

…本当に、先輩を好きになって
よかったよ……。

黒猫のおまじない

〈第9話〉

「いつてきまーす!」

台所にいるお母さん達に声をかけ、私は玄関のドアを開けた。

「わ、寒い!」

冬の風の冷たさに、思わず巻いてあったマフラーで顔をかくした。

今日は待ちに待った、クリスマス会。年に1回の特別な日…。

その時、軽いあくびがでた。

「昨日、夜遅くまで服、選んでたからなあ…。」

ピンクと黒の、チェック柄のポンチョに、白いヒラヒラのミニスカ
ート。

頭には、ポンポンがついている白いベレー帽をかぶった。

この服、かわいいけど、寒いなあ…。

家のそばの角を曲がる途中、一匹の黒猫を見つけた。

「うわー!かわいい!」

そういえば…。

黒猫を見つけたときに、好きな人の名前を10回言つと、恋に進展
があるんだっけ…。

私は、黒猫の右側にしゃがみこんだ。

「…長谷川…。」

なんか、改めてフルネームで言うと、はずかしいなあ…。

だけど…。

私は大きく息を吸った。

「…長谷川、皇…。」

この後、これを10回繰り返すのに、10分もかかってしまった。

「あ！美香、おはよ！」

私が教室に入ると、小春が可愛らしい明るい笑顔で、私のそばにきた。

「おはよ、小春！…あれ？その服って…。」

小春が自慢げに、服をポンポンとたたいた。

「へへー、わかる？」

「それ、人気ブランドのワンピースでしょ！？かわいいねー！」

「お父さんにねだって、昨日ゲットしたんだ♪」

えっへん！と言わんばかりの得意気な小春に、つい私も、顔がほころんだ。

「似合うよ、小春！」

「ありがと♪美香こそ、気合いはいつてんじゃない！」

「…まあね♪」

…小春は、私が先輩を好きだということを知らない。

言おうとしたこともあるけど、恥ずかしくて言えなかった。

…そういえば、小春の好きなひとつて、聞いたことないなあ…。

私が小春と話していると、頭の上に、なにかノートのような物が置かれた。

ふりかえると…。

「おつす、桜木。」

「匠くん！おは…」

私は匠くんを見て、

す…、すつごくかつこいい…！

白いインナーに茶色のベスト。

すらりと長い足に、デニムのジーンズがよく似合っていた。

すごい…。

結構ラフな服なのに、匠くんが着るとかつこよく見えるよ…！

「…どうかしたか？」

「あつ、いや、なんでもない！…ただ、かつこいいなあつて…。」

私の言葉に、匠くんの頬が少し紅くなった。

目をそらしている姿が、照れている証拠。

匠くんが、浅いため息をついた。

「お前はほんとに…。」

「え？なに？」

「…いや、なんでもない。桜木こそ、似合ってんじゃない。かわいい

よ。」

匠くんの言葉に、今度は私が赤くなってしまった。

匠くんって、こういう事、サラッと言っちゃうからなあ…。

気がつくとい匠くんは、自分の席についていた。

私も、浅いため息をつく。

そんな私の様子を、小春が机に腕を着きながら、見上げていた。

「?どうしたの、小春。」

「…美香ってさ…。」

小春が少し遠慮がちに、私の耳でささやいた。

「…匠くんのこと、好きなの?」「……………えっ!?!」

私は小春に言われたことを理解するのに、3秒かった。

私が!?!なんで?

困惑している私の様子を読みとつたのか、小春が続けた。

「なんか、結構、噂になってるよ。匠くんと、美香のこと。ほら、最近、帰りとか、いつも一緒じゃん。」

そんな噂があつたの!?!

全然、知らなかった…。

こんな噂、もっと広まったら、匠くんに迷惑かけちゃう…!!

私は必死に訂正した。

「好きじゃないよ!全然!」

「…ほんとに？」

疑り深い目で見てくる小春から、目をそらさないよう必死に我慢し、コクコクとうなずいた。

「本当！好きじゃないよ！」

てか私の好きな人、先輩だし…。

私の熱意（？）が伝わったのか、小春がフムフムとうなずきながら、立ち上がった。

「そうだよ…。初恋もまだな美香が、そんなわけないよね！」

「そ、そうだよ！アハハ。」

…ごめん、小春。

今、初恋真っ最中…。

心のなかで苦笑している私に、小春が、パン！と両手を合わせた。

「美香！お願い！」

「へっ！？な、なに？」

「実はね…。」

小春がまた耳元でささやく。

「アタシ…、匠くんのこと好きなんだあ…。」

「へー。…っつて、ええ！？」

私は驚きのあまり、大声をだしてしまった。クラスメイトが次々にこつちを振り返る。

「え、な、ちょ、えっ！？こ、小春が…！？本当に！？」

「…うん…」

小春、顔真っ赤…。
本当なんだ…。

「え、いつから…」

「…前ね、部活でけがしちゃった時、匠くんが保健室まで連れてってくれたんだ。…で、匠くんって優しいんだなあって…」

へー！あの、匠くんが…。

まあ、でも納得かな。匠くん、優しいから…。

「それでね、匠くんって女子で喋るの、美香だけなの。だから…、協力してほしいなあって…」

「もちろんだよ！協力する！」

「本当！？美香、ありがとう！」

私は、まるで自分の事のように嬉しかった。

匠くんも小春も、二人とも私の大切な人だもん…。

両思いになってくれたら、
嬉しいなあ…！

「小春、がんばって！」

私は、心からの笑顔でいった。

もうすぐ、クリスマス会が、始まるうとしていた…。

密かな恋

〈第10話〉

「それでは今から、クリスマス会の始まりです！」

放送委員の合図に、一斉に生徒たちから歓声があがった。

「どこ行こうかなあ♪」

私は校舎に入ろうとする人の波に流されないよう、隅っこの方に座っていた。

クリスマスツリー、きれい…。

クリスマス会は、6時から9時まで。各クラスがいろんな出し物をして、自由に回れるの！

なんか、文化祭みたい…。

そして、8時から、全生徒の一番の楽しみ・「聖夜の誓い」。
いわゆる、告白タイム。

「聖夜の誓い」のために、男子も女子もラヴァーズフラワーを探し回ってるらしい。

「桜木！」

私を呼ぶ声に、人波の中をキョロキョロと見渡すと、

「あ、匠くん！」

匠くんが、人を押し分け、私に近づいてきた。

「すごい人だな。」

「本当！校舎、入れないね。」

とその時、遠くに皇先輩の姿を見つけた。

…夏希先輩に、会いに行くのかな…。

けど、先輩は、どんどん私の方に向かって歩いてくる。

「（え、え、なんで！？）」

私が硬直している間に、いつのまにか先輩が私の前にいた。

「よっ、桜木！」

「せ、先輩なんで…。ていうか、夏希先輩はどうしたんですか？」

「ああ、夏希。夏希はちょっと家の用事があるから、7時頃来るんだって。」

「あ、そうなんですか…。」

私は少しだけ、ホッとしてしまった。

夏希先輩、遅れて来るんだ…。

「だからさ、暇でさ。ブラブラしてたら桜木がいたから…、来ちゃった。」

…、先輩その笑顔、反則…。

私は、頬が紅潮していくのを感じた。

そんな私の様子を読みとったのか、匠くんが私と先輩の間に入ってきた。

「…じゃあ、長谷川先輩。暇なら7時まで、桜木と、回ってくれば
いいじゃないですか。」

……え？

「ちよつ、匠くん！」

「いいじゃん。桜木だって、暇でしょ。それに…。」

長谷川先輩と回りたいくせに、と言う顔で、私を見ていた。

そりゃあ、一緒に回れたら夢みたいだけど…。

「長谷川先輩、いいですか？」

「ああ、オレは別に、つてかぜひお願いしたいんだけど…。もし、
桜木が嫌じゃなかったら…。」

…先輩…。

私も、先輩と一緒に回りたいよ。すつごく、回りたい…。

だけど、先輩には夏希先輩がいるし…。

もし噂とかになっちゃったら、先輩に迷惑かけちゃう…。

私が迷っていると、匠くんが私を先輩の方に思いつきり押した。

「いたっ！ちよ、匠くん…。」

「いいから。余計なこと考えてないで行ってこいって！…本当は、
行きたいんだろ？」

「っ…（／／／）。…あ、あの、先輩、私でよかったです…！」

先輩の顔が輝く。

「おっしやつ！じゃ行くぞ！」先輩が子供みたいに、私の手を引っ張った。

ちよっ、先輩…！

私は早くも、ドキドキがMAXになり、顔が更に赤くなった。

「いつてらっしやい、桜木」

「もうっ、匠くんは！…じゃあね、後で！」

私が手をふったときには、もう匠くんが見えなかった。

「…桜木のためには、これが一番いいんだよ…。っクソっ！」

匠が右足で地面を、思いつきりふんだ。

「行くな、桜木…。行くな…！」

この時の私は知らなかった。

匠くんがあんなに私を想っていてくれたことを。

そして、匠くんを、知らない間に傷つけてしまっていたことを…。

聖夜の誓い

〈第11話〉

「桜木！どこ行く？」

私と先輩は校舎の中に入り、廊下を歩いていった。

廊下には、呼び込みの生徒たちがいっぱい歩いてて、目がチカチカする…。

「私は、先輩の好きなところでいいですよ。」

「そ？オレさ、ちょっと行きたいところあってさー。ほら、コレ。」

先輩が私に差し出したパンフレットには、いろんな出し物が並んでいて、先輩が料理クラブのそこを指さしていた。

「先輩、ここ…。」

「夏希の友達のとこなんだけど。なんか、クリスマスケーキ作ってんだって！」

ケーキの名前に、先輩の顔がどんどん笑顔になる。

先輩、ケーキ好きなんだあ。

かわいいなあ。

「じゃあ、そこ行きますか？」

「マジ！？行こ、行こ！…あ。」先輩が、何かを思い出したように呟くと、私の右手を、ギュッと握った。

「せ、先輩…。」

「今日、クリスマスだし。今だけは、いいだろ？」

…っそんな顔されたら、何も言えないよ…。

なんか、前もこうやって、先輩とデートしたな…。

あの時は、まあちょっと問題あったけど、楽しかった…。

「？桜木？着いたよ。」

先輩の声に私はハツとした。

「あ、あ、本当ですね！」

「行こ！」

席につき、しばらくして出てきたケーキは、上にサンタさんとトナカイが乗ってる、チョコレートケーキだった。

「わあ、おいしそう！」

フォークを持ち、ケーキの先っぽをすくい、口に入れた。

とたんに、いちごの甘酸っぱさとチョコレートのとろけるような甘さが、口の中で絡み合い、私までとろけそうだった。

「おいしーい！」

「プツ。」

そんな私の様子を見ていた先輩が、急に笑い出した。
ヤバッ、テンション上がりすぎたかな…。

「……桜木…、かわいいな。」

「…え？」

先輩の、思いがけない不意打ちの言葉に、つい、フォークですくっ

たケーキを、お皿に落としてしまった。

「桜木、苺みたいに真っ赤」

「な、な…。だって、先輩がいきなり言うから！それに、私より夏希先輩の方が、全然かわいいですって！」

焦る私に、先輩は優しく笑い、私の頭をなでた。

「桜木はちゃんとかわいいよ。素直で、真っ直ぐで、優しくて。オレ、お前みたいなヤツ好き」

…先輩が、あんまりにも嬉しそうな顔で言うから、なにも言えなくなつた。

私はただただ、苺のように真っ赤になるだけで。

…先輩は本当、ズルい…。

彼女いるくせに、他の子にも、そういうこと言うなんて…。

だけど…、

本当にズルいのは、今先輩と過ごしてるこの時を、最高に幸せだと思つてしまつてる私――。

「…先輩だって、かっこいいですよ…！」

「え、オレが？（笑）」

「…先輩は、皆に優しくて、場の雰囲気とかも盛り上げてくれて…、すっごくキラキラしてます…。だから…、先輩は、羨ましいくらいに、かっこいいです…！」

私の言葉に、先輩もどんどん真っ赤になっていた。

「っ＝（／／／）桜木、誉めすぎだよ…。」

私は思わず笑ってしまった。

私達の姿は、周りから見たら、かなりヘンテコな図。

だけど、私は、楽しくて嬉しくて、幸せだった…。

その後も、先輩と天体部のプラネタリウムを見たり、屋上のバルコンアートを見たり…、

楽しい時間はあっという間に、過ぎていった。

「まもなく七時になりまーす。告白タイムまで、後、一時間でーす！」

スピーカーから流れる放送が、冬の屋上に響いた。

「もう、こんな時間…。」

…先輩と、もつと一緒にいたかったな…。
だけど…。

私はわざと明るく切り出した。

「もう7時ですね！さ、先輩、下に…。」

その時だった。

ドアに向かおうとした私の右腕を、先輩がつかんだ。
強く、強く…。

「せ、せんぱ…。」

「…桜木、8時まで、一緒にいないか…？」

「えっ…。でも、夏希先輩…。」「夏希はいつも一緒にいるし…。てか、オレが、桜木とまだ一緒にいたいんだ。…。ダメか？」

ドキン…。

先輩、私と一緒にいたいって、思ってくれてるの…？

夏希先輩よりも、私のことを優先してくれるの…？

…私も、先輩と、もつと一緒にいたい…。

「聖夜の誓い」だって、本当は行ってほしくないよ…。

だけど…。

「…ダメです。」

「…え？」

「先輩は、夏希先輩のところに行つてあげなきゃダメです…！」

先輩に、迷惑はかけないって決めたから…。

「夏希先輩と約束したんでしょ？きつと、夏希先輩、楽しみにします…！そんな大事な人との約束を、クリスマスを…、台無しにしちゃダメです…！」

私は、自分の幸せよりも、先輩の幸せを願いたい。
誰よりも、先輩の幸せを…。

私は、右腕をつかんでいる先輩の手を離した。

「…先輩、行つてください。」

先輩から、一歩遠のく。

先輩、早く行って…。

じゃなきゃ、引き留めなくなっちゃうから…。

「桜木……。桜木は、本当に優しいな……。…そうだな、約束破るのはダメだよな…。オレ、行ってくる!」

そう言つて、ドアへと走っていく先輩。

私が振り向いたときには、もう先輩の姿はなく、屋上には私一人しかいなかった。

「先輩…。これで、よかったんだよね…。」

先輩が、夏希先輩のそこ行つて、「聖夜の誓い」で告白して、二人が幸せで…。

これが、一番いいんだ…。

その時、屋上のドアが開いた。
私が振り向くと…、

「…やっぱり、泣いてる…。」

「匠くん…。」

汗だくで、息を切らしている、匠くんがいた……。

甘えと戸惑い

〈第12話〉

「…やっぱり、泣いてる…。」

「匠くん…。」っ…！」

私はいつの間にか、匠くんに抱きついていた。

とにかく人の温もりを感じたくて、匠くんのがっしりとした腰に、腕をまわし…。

強く、強く、抱きついた。

そんな私を、匠くんは戸惑いながらも、いつものように私の頭を、優しく撫でてくれた。

「…だから行くな、って言ったんだ。結局いつも、お前が傷つくことになる…。」

私は匠くんの胸に顔を埋めながら、細く、弱々しい声で聞いた。

「…さっきの、私と先輩の会話、聞いてたの？」

「…聞いてた。」

「そっか…。」

二人の間に、沈黙が流れた。だけど、穏やかで優しい、落ち着くような沈黙…。

「…ごめんね、匠くん。また、カッコ悪いとこ見せちゃったね…。もう、迷惑かけないつもりだったのに…。」

そう粒やいた私を、匠くんが、優しく抱きしめてくれた。

「…そんなにムリすんなって…。体、冷えきってんじゃん…。」

そう言う匠くんは、自分が着ていた上着を脱ぎ、私に着せてくれた。

その上着が、やけに暖かくて、つい、泣きそうになった。

もう一度、匠くんが私を抱きしめる。今度は、少し力強く、小さな芽を守るかのように…。

「…桜木さ、もっとオレを頼れよ…。我慢なんてしなくていい。泣きたいときは泣けばいい。全部、オレが受けとめてやる。だから…。」

匠くんが、真剣な少し悲しそうな目で私を見つめた。

「…もっと、オレに甘えろ…。」

強く、私を包みこんでくれる匠くんの声…。

いけないって、わかっているのに…。

「…甘えても、いいの…?」

「…ああ…。オレが、全部、守ってやる…。」

…お互いを、強く抱きしめた。悲しさからか、匠くんの声が、温もりが、余計に胸にしみこんで…。

涙がとまらなかった……。

「8時になりました！お待ちかねの、「聖夜の誓い」の始まりです！」

チャイムの音と共に、校庭から騒ぎ声が聞こえてきた。かなりの盛り上がり。

「もう、8時か……。」

匠くんが顔をあげ、屋上のフェンスから校庭をのぞきこんだ。「うわ、すげー、人の数……。9時で終わりそうにないな……。」

匠くんが校庭を見ている間に、私は匠くんから少し離れた。

……私、また甘えちゃった……。

匠くんとの噂があるって、わかってたのに……。

しかも、匠くんは小春の好きな人なんだよ？

本当なら、小春と匠くんを二人にしてあげなきゃいけないのに……。私が二人になってどうすんの……。

「……桜木？」

落ちこんでいる私に気づいた匠くんが、私の隣に座った。

「……もう、落ち着いたか？」

「……うん、少しだけ……。」

「そっか……。寒くない？」

「平気。それより、匠くん、寒くないの？」

「オレは平気……。」

私は、なんとなく匠くんの顔を見ることが出来なかった。

ちょっと不安定だったからって、私、なんて大胆なことを…。

そう思うと、恥ずかしくて目なんか見れなかった。

「そつ、そういえば、皇先輩どうしたんだろ！」

「あ、おいっ…。」

私は勢いよく立ち上がり、フェンスに手をかけ、先輩を探した。

と、クリスマスツリーの前で、楽しそうに笑っている、皇先輩と夏希先輩が…。

「…先輩、ちゃんと渡せたのかな…。」

…って、また私、先輩のこと考えてるよ…。

匠くんというのに…。

さつき抱きしめられてた時は、先輩のこと忘れてられたけど、今は、先輩の顔しか浮かばないよ…。

その時、匠くんが私を後ろから抱きしめた。

「…大丈夫。オレがここにいてやるから。無理して諦めようとしな
いで、泣け…。」

っ匠くん…。

匠くんはなんで、こんなに優しくしてくれるんだろう。

匠くんはなんで、私を守ろうとしてくれるんだろう。

匠くんはなんで、こんなにもあたたかいんだろう――。

とその時、屋上のドアが、ゆっくりと開いた。

入ってきたのは…。

揺れた天秤

〈第13話〉

ドアがゆっくりと開き、入ってきたのは…。

「美香…！」

「こ、小春…！？」

私は思わず、匠くんを突き飛ばしてしまった。
誤解でもされたら大変…！

「ど、どうしたの小春。」

「どうしたのじゃないよ！ずっと探してたんだから！」

「へ…、なんで？」

「なんでって…。」

小春が少し頬を膨らませながら、私と匠くんに一歩近づいた。

「美香、さっきまで長谷川先輩と一緒にいたんでしょ？」

「え…。」

まさかここで皇先輩の名前が出てくるとは思わず、私は一瞬、停止してしまった。

あっ、さっき一緒に回ってたときのことか…。

「そ、そうだけど…。なんで小春が知ってるの？」

「さつき、校庭で長谷川先輩に声かけられて。なんか、「桜木のと置いてきちゃったから、行ってやってくんない？」って、めっちゃ心配そうに言われて…。」

「えっ、先輩が!？」

先輩、私のこと心配してくれてたんだ…。

……なんか…、嬉しいな…。

私は、自然と、顔がほころんでいくのがわかった。

「?美香、何笑ってんの？」

「な、なんでもないよ!」

私は、両手の手のひらで、顔を押さえた。冬だというのに、顔が熱かった。

「あ、で、それで、小春は来てくれたの？」

「そーだよ!めっちゃ探したんだから!…なのに、美香、匠くんと一緒にいるし…。」

小春の、初めて聞く泣き出しそうな声に、私は思いつきり、首を横にふった。

「違うよ、小春!匠くんはただ、私をなぐさめてくれただけ!別になんともないって!」

「……なんで泣いてたの？」

「そ、それは言えないけど…。とにかく!なんでもないの!」

疑ってる小春に、私は何度も訂正した。

匠くんにも、「何かいって!」って、後ろ振り返ったのに、なんか

匠くん、怒ったような顔してた…。なんでだろ？

「そ、それより小春！」

私はわざと、明るい話題に切り替えた。

「その、あの…さ、皇先輩って、夏希先輩に、ラヴァーズフラワー、渡したのかな？」

小春が少し考えるように首をかしげ、「あっ！」と口を大きく開け顔を上げた。

「ずっと見てたけど、多分、渡してなかったよ。」

「えっ…、渡さなかったの!？」

先輩…。

どうしたんだろ…。

ケンカとか？

でもさっき、夏希先輩と楽しそうに笑ってたし…。

とその時、匠くんがドアに向かって歩き出した。

「ここで話してないで、とにかく中入ろうぜ。寒いだろ。」

「あ、うん、そうだね！」

首をかしげる私と、嬉しそうに匠くんに着いていく小春…。

私は数時間ぶりに、屋上の外にでた。

「で、どーすんの？てか、今何時だよ。」

「えっとねー、今は…、8時半くらいかな。でも、絶対、9時に終わらないって！」

小春が、「告白タイム、今からでも間に合うよ。」とでも言いたそうに、匠くんをチラチラと見てることに私は気づいた。

どうしょ…。

今は正直言って、一人になりたくない…。

匠くんにそばにいてほしい…。

だけど、匠くんは小春の好きな人であって…、

私の、好きな人じゃない——。

だから、そばにいてほしいなんて、そんなわがまま言えない…。

私は、顔を上げた。

「じ、じゃあさ、小春と匠くん、二人で回ってきなよ！」

「え…。」

「ほら、まだ時間あるみたいだし！ここで固まったら、もったいないよ！」

私はこの時、自分が作り笑いをしていることに気づかなかった。

「えー、だけど、美香はどうするの？」

そう言いつつも、小春は嬉しそうな顔してる。

匠くんは…、なんか、驚いてる？「わ、私はどっかで休んでるよ！ちよつと、疲れちゃったし！」

「そお？だけど、匠くん、嫌なんじゃない？」

小春がおずおずと匠くんの方を見た。

「…オレは…。」

一瞬、匠くんの視線が、私に向けられた。その、なんだか悲しそうでも真っ直ぐな、深い茶色の瞳に、私は吸い込まれそうになってしまった。

匠くん、なんでそんな、悲しそうな目してるの…？

「あ、あの…。」

私が匠くんに話しかけようとした次の瞬間、匠くんが私から、目を背けた。

まるで拒絶するかのように…。

「……いいよ。あんたと一緒に回る。別に嫌じゃないし。」

「えっ、本当!？」

「ああ。」

小春の顔が輝きだす。

匠くんは、真っ赤になってる小春の腕をつかみ、スタスタと階段を降りていった。

途中、屋上のドアの前で固まってる私に振り向き…、

「…じゃーな、桜木…。」

…その言葉と、匠くんの冷たい視線に、別れを告げられてるようだった。

どうして…、

そんな冷たい声で言うの…？

『行かないで…!』

言葉にならない叫び声。

胸がいたい。

皇先輩の時よりも、ずっと、胸がいたい…。

私の好きな人は先輩。

それは間違いない。

だってほら、先輩のこと思い出すと、こんなにもドキドキする…。

なのに…。

さっき、匠くんを突きとばしてしまった右手の手のひらが、

なにかに切られたかのように、ズキズキする…。

『私が本当に好きなのは、誰なんだろう…。』

初めて、そう思った。

水平を保っていた天秤が、かすかに揺れた気がした…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4291z/>

「先輩、あのね。～tearlove～」

2012年1月5日19時49分発行